

平成 21 年 6 月 20 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18730400

研究課題名 (和文) 潜在的・顕在的な自己観・健康行動に対する態度と健康行動との関係性に関する研究

研究課題名 (英文) Relationships between implicit and explicit self-esteem, attitudes toward health, and healthy behavior.

研究代表者

小林 知博 (KOBAYASHI CHIHIRO)

神戸女学院大学・人間科学部・准教授

研究者番号：70413060

研究成果の概要：

高齢者と若齢者 (研究 1)、禁煙外来患者 (研究 2) を対象とし、自己観や健康行動に関連する 2 つの実験的研究を行った。測定は質問紙 (顕在的測定) と IAT (Implicit Association Test, 潜在的測定) の両方を用いた。研究 1 では、高齢者の精神的健康や健康増進行動には、潜在的、顕在的な「自己健康観」や「他者との関係良好性」が大きく関わっていること、研究 2 では、禁煙開始前の潜在的な煙草イメージが、禁煙開始 1 ヶ月後の体内ニコチン濃度を予測すること、また家族からの支援が禁煙の遂行に関わることが明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,000,000	240,000	3,240,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：

(1) 潜在的態度 (2) Implicit Association Test (3) 自己観 (4) 健康促進行動  
(5) 喫煙への態度

## 1. 研究開始当初の背景

近年の社会心理学の領域では、態度には、意識的にコントロールできない自動的 (潜在的) な態度、意識的にコントロールが可能な統制された (顕在的) 態度の 2 種類があるとされている。それら 2 種類の態度は、評価懸念が高い (プライベートに関わることであったり社会的に望ましくない考えであったりして、他者に知られたくないと思う程度が高い) 領域や、自分自身で認めたくないような

領域において乖離の度合いが高くなることが分かっている。特に自分自身に関連する態度でネガティブなものについては、人はその態度をゆがめて表明してしまう可能性が高いことが指摘されている (e.g., Greenwald & Nosek, 2001)。

潜在的態度を測定する方法には幾つかの方法が開発されているが、その中でも最も結果の信頼性や安定性が高いとされるものに、IAT (Implicit Association Test 以下 IAT)

がある。IAT は、Greenwald と Banaji ら (Greenwald & Banaji, 1995; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)によって提案・開発されて以来、潜在的態度を扱う研究の多くに用いられ、研究数の増加は顕著である。

そして本研究開始当初において、偏見、ステレオタイプ、抑うつや社会的不安、攻撃性、食生活など、人間のさまざまな行動と潜在的態度との関連が指摘されつつあった。そして臨床場面や応用的領域においての潜在的態度測定も増加の傾向にあり、顕在的・潜在的な態度がそれぞれ別の社会的行動に影響を与えていることが明らかになっていた (e. g., Strack & Deutsch, 2004)。

しかし、日本においては潜在的態度を扱った研究は未だ少数であり、ましてや臨床領域や応用領域と関連させた研究はほとんどない。それらの研究を行うには、研究対象者を大学生以外に広げる必要があり、実質的にデータ収集が困難になるという背景もある。

本研究では、高齢者や喫煙者など、大学生以外に研究対象者を広げ、健康行動、喫煙や食生活などの生活習慣や意志決定に、顕在的・潜在的態度がどの程度かかわるのかを検討する研究を行う。特に IAT を用いた喫煙についての潜在的態度と顕在的態度の介入前後の変化について検討した研究は、欧米、日本を問わず、未だに行われていない。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、潜在的、顕在的自己観とともに健康や喫煙についての潜在的態度と顕在的態度の関係性を検討し、健康行動や禁煙成功などを予測する変数の検討を目指すことである。そして、将来的には臨床方面、特に煙草やアルコール依存、過食などの常習行動 (addictive behavior) の予測・抑制への潜在的指標の活用を目的としている。

下記の2つの研究を通じ、日常的な健康増進行動や禁煙行動を予測することを目指した。

研究1では、「自己」や「健康」に対する態度について、若年者と高齢者の潜在的・顕在的態度を測定し、その態度構造の差異を明らかにした。また、客観的な行動指標として日常的な運動量を測定した。

研究2では、禁煙外来にて禁煙を志す者を対象に、禁煙開始時、禁煙開始1ヶ月目、禁煙開始3ヶ月目、の3回にわたり縦断的に、潜在的、顕在的な「煙草イメージ」「自分と煙草の近さ」を測定した。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究1

#### ①実験参加者：

高齢者 48名 (男性24名、女性24名、平均年齢68.65(標準偏差4.54、範囲61-77))。

大阪府内のシルバー人材センターを通して参加者を募った。

若齢者 36名 (男性18名、女性18名、平均年齢20.83才(標準偏差1.70、範囲19-27))。大学の授業を通じて参加者を募った。

#### ②手続き

参加者は2~4人を1組として実験に参加した。複数の実験参加者間にはパーティションにて区切り、互いが見えないよう配慮した。

まず潜在的な自己観や健康観を測定する IAT (Implicit Association Test; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)、次に顕在的な自尊心や健康観を測定する質問紙を行った。さらに、翌週に別の実験のため再度来室するまでの間、ライフコーダー (生活習慣記録機。毎日の歩数や運動量を測定) を身につけてもらうよう依頼した。

最後にこの実験と次に行ってもらう実験についての説明を行って、この実験は終了となった。特に研究参加への任意性と個人情報保護の保護、また研究結果の公表については詳細に説明した。

#### ③測定課題

・潜在的連合テスト (Implicit Association Test) : 潜在的指標

実験参加者は、1)「自己」への態度、2)自分の「健康」感、の2種類の IAT 課題を行った。1)2)の課題の順番および、一致・不一致課題のどちらを先に行うかは、実験参加者番号により自動的に振り分けられ、カウンターバランスされた。

・質問紙：顕在的指標

質問紙で測定した尺度は下記の通りである。

・自尊心尺度 (Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成, 1982) 10項目：「少なくとも人並みには、価値のある人間である。」「自分に対して肯定的である。」などの項目について「あてはまらない」から「あてはまる」まで5件法で尋ねた。

・「自分」への態度 10項目：自分自身のイメージとして、10項目の SD 尺度を7件法で尋ねた。SD 尺度の形容詞は、IAT 課題で用いた10個の形容詞 (素敵、心地よいなど) を、逆の意味を持つものと対にして使用した。

・所属欲求尺度 (Leary, Kelly, Cottrell, & Schreindorfer, 2005; 小林・谷口・木村・Leary, 2006) 10項目：「困ったときに頼れる人がいると常に感じていたい」「他の人に受け入れてもらいたい」など、人の仲間に所属して欲しいという欲求を測定する尺度。「あてはまらない」から「非常によくあてはまる」まで5件法で問うた。

・主観的幸福感：「幸福な」「楽しい」などの形容詞5項目について、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7件法で問うた。

- ・ 精神的健康 (General Health Questionnaire, GHQ-28, 中川・大坊, 1996):
- ・ デモグラフィック項目: 性別、年齢、一緒に住んでいる人を尋ねる項目 (配偶者、親など)
- ・ その他、生活習慣全般

## (2) 研究2

### ① 実験参加者:

2008年4月より2009年2月まで、大阪府内の病院の禁煙外来に通う者のうち、研究同意が得られ且つ30分程度の研究協力に同意が得られた者45名(平均年齢54.81)。

調査は禁煙外来診察後に行った。ただしパソコン操作を含むため、高齢者(70歳以上)やパソコン操作に不安を覚える者等については対象外とした。

1回目(禁煙開始前)、2回目(禁煙開始後1ヶ月目)、3回目(禁煙開始後3ヶ月目、受診最終日)の、合計3回の時点での喫煙イメージを縦断的に調査した。分析に使用した人数は、1~3回目の順に45, 26, 25人である(途中を飛ばして受診した者がいるため、2回目の参加者数が少なくなっている)。

### ② 手続き

通常禁煙外来での診察終了後、1人ずつ奥の小部屋にて個別で実験を行った。参加者にはまず全体の概略を説明し、IATを実施、その後質問紙への回答を求めた。

### ③ 測定課題

・ 潜在的指標 (IAT): 1) 煙草に対するイメージ (煙草・文具 v.s. 良い・悪いの連合強度)、2) 煙草と自分の近さ (煙草・文具 v.s. 自分・他者の連合強度) を測定した。

・ 顕在的指標 (質問紙): 煙草に対するイメージ、禁煙に踏み切らなかった理由、禁煙を開始してからの心理的、身体的変化、周囲の者から受けている援助など。本報告では特に煙草に対するイメージについて報告する。

・ 依存度: ニコチン依存度スクリーニングテスト (TDS; Kawakami et al., 1999)、ファーストロームのニコチン依存度指数 (FTND; Heatherton, 1991)

・ 喫煙量: 1日あたり喫煙する煙草の本数(ただし自己報告)、呼気中のCO濃度、尿中ニコチン濃度。

## 4. 研究成果

### (1) 研究1

#### ① 高齢者と若齢者の自尊心の比較

まず高齢者と若齢者の顕在的および潜在的自尊心を比較する(図1a、1b参照)。

潜在的自尊心は反応時間をもとにしており、高齢者は若齢者よりも反応時間が長い。本研究ではIAT指標として反応時間の標準偏差の影響を考慮に入れたD値を使用している (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003)。

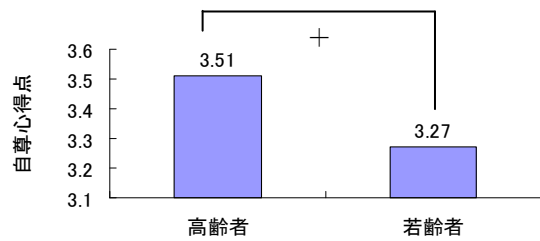


図1a. 参加者集団別の顕在的自尊心 (RSES)

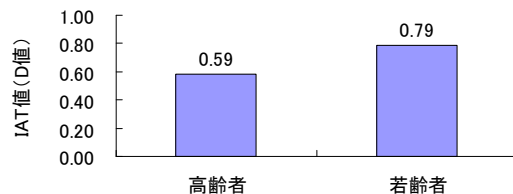


図1b. 参加者集団別の潜在的自尊心 (IAT値)

顕在的には、高齢者は若齢者よりも自尊心が高い傾向がある ( $t(78)=1.70, p<.10$ ) が、潜在的な自尊心は高齢者が若齢者よりも低い ( $t(78)=2.19, p<.05$ )。この結果から、高齢は一般的にポジティブな印象でとらえられにくい。潜在的には高齢者の自尊心も若齢者より低くなっているが、顕在的にはそれを認めることが難しく、高めの評定が行われているのではないかと推測できる。

### ② 潜在的・顕在的自尊心と社会的適応

次に、顕在的、潜在的自尊心の組み合わせによる、社会的適応への影響を検討するため、平均値にてそれぞれの参加者を潜在的自尊心高群・低群 (平均値: 高齢者=.51、若齢者=.68)、顕在的自尊心高群・低群 (平均値: 高齢者=3.51、若齢者=3.27) と分け、それらを独立変数とし、主観的幸福感、孤独感、1週間の歩数、1週間の運動量、GHQをそれぞれ従属変数とした2要因分散分析を高齢者・若齢者別に行った。その結果、高齢者と若齢者で異なる結果が得られた。

#### < 高齢者の結果 >

主観的幸福感を従属変数とした分析の結果、顕在的自尊心 (以後、顕自) と潜在的自尊心 (以後、潜自) の交互作用効果が有意であった ( $F(1, 41)=4.48, p<.05, \eta^2=.10$ 、図2参照)。

同様に、従属変数を一日当たりの運動量

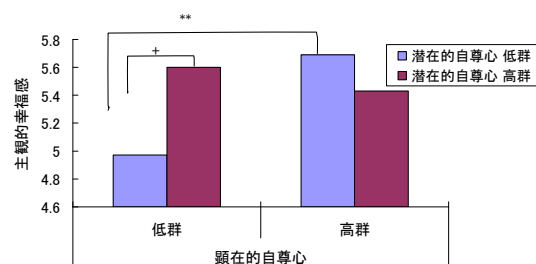


図2. 顕在的・潜在的自尊心別、主観的幸福感(高齢者)

(kcal) としても ( $F(1, 41)=3.28, p<.08, \eta^2=.07$ )、一日あたりの歩数 ( $F(1, 41)=3.73, p<.06, \eta^2=.08$ ) としても同じ方向の交互作用効果が有意であった(図3, 4)。GHQ、UCLA 孤独感尺度についても同様の方向性は見られたが有意な結果は得られなかった。有意差が得られた主観的幸福と一日当たりの運動量、一日当たりの歩数については、下位検定の結果、すべて顕自高・潜自低群が高い値になっており、顕自低・潜自低群との間に有意な差が見られている。

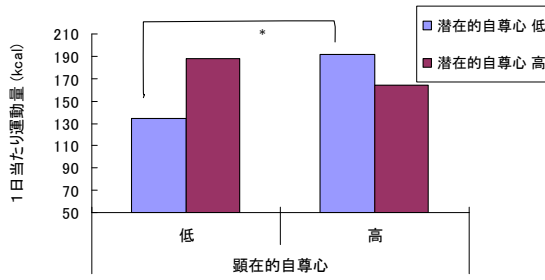


図3. 顕在的・潜在的自尊心別、運動量/日(高齢者)

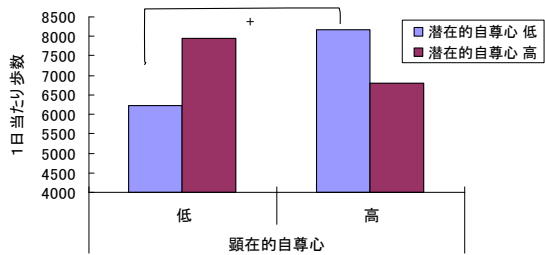


図4. 顕在的・潜在的自尊心別、歩数/日(高齢者)

<若齢者の結果>

主観的幸福感(図5)、孤独感(図6)を従属変数とした2要因分散分析の結果、有意な交互作用効果がみられた(それぞれ  $F(1, 30)=3.53, p<.07, \eta^2=.12$ ;  $F(1, 30)=6.18, p<.05, \eta^2=.17$ )。下位検定の結果、顕自高・潜自低群は顕自低・潜自低群に比べて高い社会的な適応を示していることがわかった。

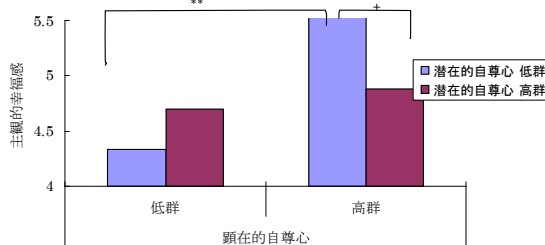


図5. 顕在的・潜在的自尊心別、主観的幸福感(若齢者)

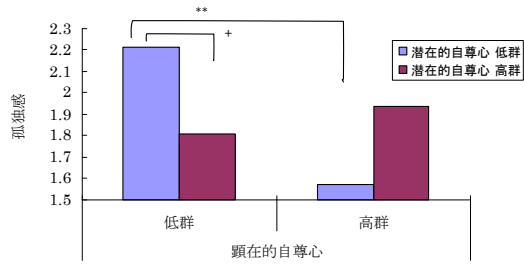


図6. 顕在的・潜在的自尊心別、孤独感(若齢者)

以上の結果をまとめると、高齢者、若齢者の全ての従属変数において、顕自高・潜自低群は顕自低・潜自低群に比べて高い社会的な適応を示し、顕自低・潜自低群が最も社会的に不適応であることが確認された。また本研究における高齢者の分析結果からは、顕自低・潜自高群は、社会的な適応が悪いわけではないことが明らかになったが、ここから、顕在的な低自尊心者であっても、潜在的自尊心が低くない限り、社会的適応に悪い影響はないと考えることができる。

次に、高齢者と若齢者の違いについて考えてみる。高齢者では、顕自高・潜自低群、顕自高・潜自高群、顕自低・潜自高群の間には有意な差が見られなかったが、若齢者では主観的幸福感において、顕自高・潜自低群が他の群より有意に高い評価値となった。つまり、顕自高・潜自低群は他の群より有意にポジティブな自己観を持っているということである。先行研究では、顕自が高い群の中でも、潜自が低い群はナルシズムとの相関が高く、「防衛型・不安定型」だとされている(e.g., Jordan, et al., 2003; Zeigler-Hill, 2006)。有意差が見られた従属変数は主観的な評価のみで、ポジティブな行動指標との関係は見られていない。ここから、若齢者の顕自高・潜自低群の背後には、先行研究で指摘されるようなナルシズムの存在が考えられる。ナルシズム的傾向は、特に大学生ぐらいの若齢者に多く見られる可能性があり、それが何らかの社会的不適応と関連するのであれば、今後も「防衛型・不安定型」自尊心の様相について継続して検討していく必要がある。

上述のように、本研究の結果では若齢者にはナルシズムが疑われる傾向が見られたが、高齢者には見られなかった。高齢者では、顕自高・潜自低群、顕自低・潜自高群がほぼ同程度のポジティブな反応をしている。そして、若齢者の結果との相違点として、高齢者では行動指標である「社会的活動指標」においても顕自高・潜自低群、顕自低・潜自高群は健康的な反応をしている。高齢者にとって、顕自高・潜自低群はナルシズム的というより、むしろ社会的に適応していると考えて良いのかもしれない。

②自分の「健康」感

健康については、潜在的には高齢者と若齢



者の間に有意な差は得られなかった（高齢者 0.56、若齢者 0.65）。

顕在的には「自分の健康状態」と「健康への心がけ」の2指標を測定したが、高齢者・若齢者間で有意差が得られたのは「健康への心がけ」だけであった（ $t(78)=6.90, p<.001, \text{図}$ ）。高齢者は若齢者と比較して、潜在的には自分と健康イメージの強さは変わらないが顕在的に「自分と健康への心がけ」のイメージが高い。

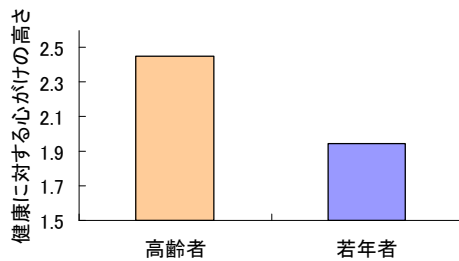


図7. 高齢者と若齢者の健康への心がけの高さ

「心がけ」については、評定値1「まったく心がけていない」、2「どちらかといえば心がけている」、3「心がけている」という回答方式のため、意味上の理論的中点（どちらともいえない）は存在しないが、1と2の中間で1.5あたりであろう。 $t$ 検定の結果とあわせ、高齢者も若齢者も心がけはあるが、高齢者の方がその気持ちがより高いことが分かる。高齢者の方が自分の健康に不安があるために自覚的に心がけを高く持っていると推察できる。

高齢者、若齢者別に、独立変数として健康への心がけ、自分・運動イメージ、自分・仲間イメージ、潜在的な自分と健康の近さ、所属欲求を、従属変数には社会的適応や行動指標として、主観的幸福感、GHQ、1週間の運動量、1週間の歩数、1週間の活動時間合計を使用し、重回帰分析（ステップワイズ法）を高齢者、若齢者ごとに行った。

その結果、高齢者の場合、1週間の運動量や歩数を規定するのは所属欲求の高さであることが明らかになった（ $\beta = .36 \sim .33, p<.05$ ）。他方、若齢者の場合は、所属欲求は1週間の平均運動量に負の効果を持っていた（ $\beta = -.41, p<.05$ ）。一週間の平均運動量、平均歩数、平均活動時間は、いずれも若齢者の方が高齢者よりも有意に高い値となっている（それぞれ、 $t(70)=5.08, 4.73, 3.64, ps<.001$ ）。平均値は高齢者・若齢者の順に、平均運動量 168.5, 271.0; 平均歩数 7283.6, 10449.3; 平均活動時間 78.7, 104.4）。若齢者は大学生ということもあり、所属欲求にかかわらずある程度の運動を日々行っていたり、あるいは、所属欲求の低い者の方が、人と交わって話をしたりすることよりも自分の意志に従って運動や活動をしたりしていると考えること

ができる。逆に高齢者は、自ら予定を入れないと自宅から出ない日が続く可能性があり、健康増進のためには所属欲求の高さが促進的に機能している可能性が指摘できる。

また主観的幸福感については、高齢者は「健康への心がけ」が有意な効果を持っていたが（ $\beta = .39, p<.01$ ）、若齢者では自分と健康のイメージの近さが有意な効果を持っていた（ $\beta = .65, p<.01$ ）。高齢者・若齢者を問わず、「健康であること」や「健康を志向すること」が主観的幸福感につながることを示されたといえる。

## (2) 研究2

平均煙草本数の継時的変化は、1回目 29.8本、2回目 7.8本、3回目 0本（ $F(2, 16)=10.66, p<.001$ ）であった。

### ① 顕在指標（質問紙）の変化

「煙草」、「煙草を吸う人」に対する感情温度計の数値（図8）より、回を追う毎に感情温度が下がっていることが分かる。クロンバックの $\alpha$ 係数が.80であったため、それらを合算し反復測定分散分析を行ったところ、時間による感情温度の低下が有意（ $F(2, 26)=5.89, p<.01$ ）であった。

その他に「煙草」「煙草の煙」「煙草の感触」「煙草の煙」「煙草を吸う人」についてのイメージ評定も測定した（図8）。クロンバックの $\alpha$ 係数は.74であったため、それらの指標を合算し、反復測定分散分析を行ったところ、時間による煙草イメージの低下が有意（ $F(2, 28)= 3.92, p<.05$ ）であった。

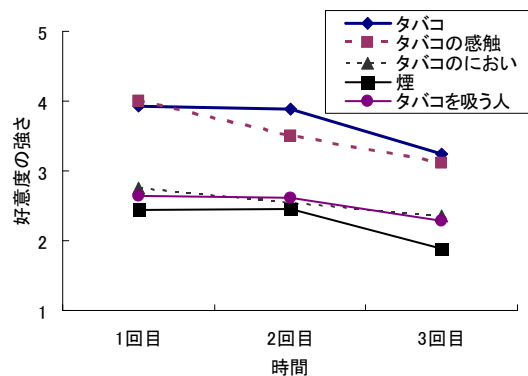


図8. 煙草に対する好意度（顕在的）・継時的変化

### ② 潜在的指標（IAT）の変化

図9に、1)煙草に対するイメージ、2)煙草と自分の距離の継時的変化を示す。値が高くなるほど1)煙草=悪い、2)煙草=他者（自分から遠い）という意味となる。

反復測定分散分析の結果は、それぞれ1) $F(2, 32) = 1.92, n.s.$ 、2) $F(2, 32) = 2.91, p<.07$ であった。1)のイメージについては方向性としては時間が経つにつれ「煙草=悪い」と評価されているが、時間経過による有意差はみられず、顕在的な反応とは異なり潜

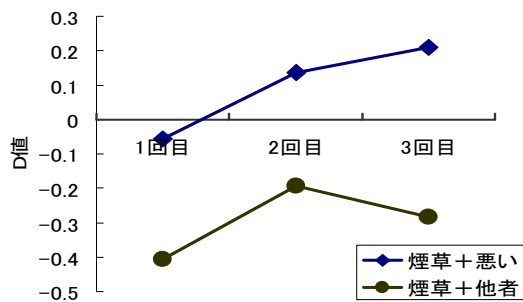


図9. IAT D値の継時的変化

在的には「煙草＝良い」という考えが抜けにくいことを示している。2)の煙草と自分との近さについては有意傾向がみられ、下位検定の結果、1回目と2回目で有意に値が上昇しており、1回目から2回目にかけては、参加者は「自分と煙草の距離が遠くなった」と感じていたことが示された。2回目と3回目の間には有意差はない。ただし全体的に値が負であることから、禁煙治療期間の3ヶ月の間は全般的に「煙草と自分の距離は近い」と感じられていたことが分かる。やはり潜在的指標は顕在的指標とは異なる継時的変化が見られ、「煙草」に対する「好意的な思い」を断ち切ることは難しいことが分かる。

### ③行動指標（呼気CO濃度、尿中ニコチン濃度）との相関

・行動指標の変化：呼気CO濃度は、1回目～3回目にかけて値はそれぞれ12.43、6.0、2.14であり、尿中ニコチン濃度についてもそれぞれ、12.43、6.0、2.14であり、全体として順調に下がっている。

・行動指標と顕在的指標：感情温度計の値は、行動指標とは相関がなかった。イメージ評価の方は1回目の煙草イメージが良いほど1回目および2回目時点での喫煙本数が多い傾向がみられた（それぞれ  $r=.444$ ,  $p<.02$ ,  $r=.43$ ,  $p<.10$ ）。

・行動指標と潜在的指標：1回目の「煙草＝悪い」D値と2回目時点での尿ニコチン濃度との相関は有意傾向であり（ $r=-.58$ ,  $p<.10$ ）、1回目に「煙草＝良い」の連合が強い者ほど2回目時点でのニコチン濃度が高くなる傾向があることが示された。また3回目の「煙草＝悪い」「煙草＝他者」D値と、3回目時点での尿ニコチン濃度と呼気CO濃度に有意な相関がみられた（ $r=-.79$ ～ $-.88$ ,  $p<.05$ ）。

まとめると、顕在的指標と関連するのは行動指標のうちでも自己報告による喫煙本数、潜在的測度が関連するのは自己報告によらない行動指標であり、それぞれ別の行動と関連していることが明らかになった。今後はさらに対象者を増やし、禁煙開始後3ヶ月時点に加え、開始後6ヶ月時点での禁煙成功の可否を顕在的・潜在的指標が予測できるかを詳細に検討していく。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

[学会発表] (計 5 件)

①小林知博・平井啓 (2009) 潜在的・顕在的なタバコイメージが禁煙行動に及ぼす影響 日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会, 2009.10.10-12., 大阪大学

②Kobayashi, C., Hazama, A., & Hirai, K. (2009) Influence of implicit and explicit self-esteem on the smoke-quitting patients' recognition on smoking and their situation. Data to be presented at the symposium at the 6th Biennial Conference of the International Academy of Intercultural Research, Honolulu, Hawaii. August 16-19, 2009.

③Kobayashi, C., Yamaguchi, S., Masumoto, K., Tabuchi, M., Arai, R., Hirai, K., & Fujita, A. (2008). Relationships between the type of implicit and explicit self-esteem and social adaptation. Data to be presented at the symposium at the 29th International Congress of Psychology, Berlin. July, 2008.

④Kobayashi, C., Masumoto, K., Tabuchi, M., Arai, R., Hirai, K., & Fujita, A. (2007) Relationships between implicit and explicit health attitudes and health-related behavior. 7th Conference of Asian Association of Social Psychology, Kota Kinabalu, Malaysia. July 26, 2007.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小林 知博 (KOBAYASHI CHIHIRO)  
神戸女学院大学・人間科学部・准教授  
研究者番号：70413060

### (2) 研究協力者

平井 啓 (HIRAI KEI)  
大阪大学・コミュニケーションデザイン・センター・助教  
研究者番号：70294014

狭間 礼子 (HAZAMA AYAKO)  
大阪大学大学院医学系研究科公衆衛生学教室 研究生